

【特別講演2】 第24席

『難経』と経絡についての一考察

京都 中野 勝輝

『難経』については、多くの解説書が出ている。徐霊胎の解説書を手に入れたので、それを読んで感じたこと、及び『難経』について疑問に思っていた点を少し突っ込んで発表しようと思う。

1. 扁鵲説の周辺について

徐霊胎も『難経』を扁鵲の著としているが、扁鵲は一人なのか、多数なのか、外国人なのか、3~400年も扁鵲は生きたのか、諸説あるが、扁鵲を遍歴医で扁鵲学派の何人もの医者と仮定した場合、インドの医者たちとの交流があったや否や、『チャラカ・サンヒター』というインドの内科書のチャラカなる医者も、チャラカが「動きまわる」といった意味を持っているらしく、このへんまで話題を広げようと思う。

2. 脈と経絡について

扁鵲の脈書といわれるぐらい脈については扁鵲の中でも重要な位置をしめている。独取寸口の脈という時でも、太陰肺経という十二正経の一経の一位置を見るわけであるが、とすれば十二正経は動脈のことか、という事になる。チベットの『四部医典』との比較をして、十二正経と臓腑の表裏が完全に一致するにもかかわらず、チベットの方では白脈、すなわち神経となってしまう、神経が拍動するわけでもなく、この矛盾をどう考えるのか？経絡の実体について広い観点からみてみようと思う。

3. 三焦・命門について—チベットの龍・赤巳・倍披、インドの vata、pitta、kapha との比較。

4. 『素問』『靈枢』との違いは歴史的に何を意味するか？漢方医学の学問的伝授の方法、教育の方法、を歴史的に考察する何かの視点を与えてくれるものと思う。

5. その他